

<追悼文>一冊の本

武者, 英二

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

1995-02-24

一 冊 の 本

武者英二

机の上に、2年近くも置かれた1冊の本がある。私の専門領域からすれば、いささか門外漢の著書である。中本正智著の『日本語の系譜』がそれだ。読み返しては閉じられ、また読み返す。内容への理解は少しも進展しないのだが、私にとって読み返すことは、砂浜に戯れる波のような気分で、こよなく楽しい行為なのである。しかし、彼に与えられた設問に答える方法がなかなか見えてこないのである。

突然、私にとっては突然という言葉しか見つからないのだが、その本の贈り主は、遠い国へ旅立たれてしまった。悔やんでも悔やみきれない複雑な思いと、この本への蟠りが心の中に大きな位置を今も占めている。

彼と私は同年である。それを知ったのは、ずい分と後のことである。1980年か81年頃、久米島でお会いしたのが最初だったと記憶する。いつも笑みを絶やさず、落ち着いた物腰、細かい気配り、何よりも沖縄の風がよく似合う大人の風貌の持主だった。様子から、年上と思いついでいた。その直感がはずれたとわかったのは、かなり時が過ぎてからである。

今でもよく覚えているのだが、彼はいつものように笑みをたたえて大学に入学したばかりのご子息をつれて、私のアトリエに訪ねてこられた。「息子が武者さんと同じ建築に進むことになった。私の専門外なのでよろしく」という主旨のようなことをいわれた。

私にも同年の子供がおり、親と異なる方向を目指すことになっていたもので、何となく彼の気持がわかるようで、うれしくもあり、またちょっぴりさびしい気分も理解できた。それをきっかけに、彼とは急速に親しくなったように思う。ご子息は立派に成長され、建築界で活躍をされている。折にふれ、私のところに訪ねてくれるのは、何よりもうれしい。

個人的なことはさておき、彼と私との設問のやりとりは、彼がつくった言語地図の上に、建築的な言語を重ねることができないかというのである。

建築は人びとの暮らしを基礎とした技術と芸術の結晶といえるだろう。建築の用語には、日常生活と切り離せないものが多い。「間がいい」「間がわるい」の「間」は建築の重要な部位である柱と柱のあいだの寸法、または関係を示す用語である。二間の家、三間の家といえは広さの単位をあらわす。「間がぬける」といえば音楽などで、拍子が合わないことや、ばかげて見えること。「間を置く」といえば、時間的な間隔を少しあける意味になる。物と物のあいだの空間的な関係や、時間的な経過をあらわす言葉として広く日常生活に用いられている。こうした建築的技術用語と日常的な生活用語（どちらが卵で鶏かわからないのだが）

を拾い出し、地域的変化や特性を見ようというのである。そこには、建築技術の伝搬の経路や住様式の拡がりが見えてくるのではないか。豪雪地帯や強風地帯、あるいは亜熱帯や亜寒帯では住居のつくり方も生活の仕方も異なる。当然、気候や風土へのかかわり方の言語表現が、建築のなかにあるはずである。そうしたことを丹念に調べることが、日本文化の基層を少しずつではあるが、解明していくことだ。それが、彼の設問だったのではと今にして思う。

建築の領域からすれば、建築形態や平面形の変遷、あるいは平面形の分布などから地域特性を調べることが多い。彼は言語学と建築学と、さらに生活学などの融合したところ、専門領域をこえた学際的な研究こそが新しい研究の地平を切り開くと考えていたにちがいない。

アルプスで発見された5千年前のミイラ「アイスマン」の記事を夏頃の新聞で読んだ。アイスマンの遺伝子分析から、発見された地域の人の10数名がその血縁者であることが分かったという。わずかに数ミリグラムのサンプルから、5千年の時空を飛びこえて、現代人に引継がれている遺伝子を発見する技術に目を見はりながら、中本正智の研究は言語遺伝子の研究だったのではないかと思ひ巡らすのである。しかし、もう確かめるべき彼はいない。

この追悼文を書きおえた10月24日の朝日新聞の朝刊に、方言教育の現場からのレポートが紹介されていた。秋田県羽後中学校——国語の授業で鈴木ミ子教諭が生徒に聞く。

先生「長男のことは、方言で何ていうかな」

生徒「いひたなげ」

先生「なぜ、そういう言葉になったのでしょうか」

生徒「いひは家がなま^まったと思う。たなげは持つ。家を持つ人という意味で長男になった」

先生「実はいひは位牌のことなんです。位牌を持つ人が長男だったんですね」

方言の価値と共通語とを関連させながら、子供たちと言葉の表現の学習をする。この記事が彼が知ったら、さぞよろこんだらう。彼の言語研究の基底には、方言でなければ表現できない人の気持ちや季節感、風景など感性豊かな人間教育の原点を見据えていたのではないかとも思う。合掌。

(法政大学工学部教授)